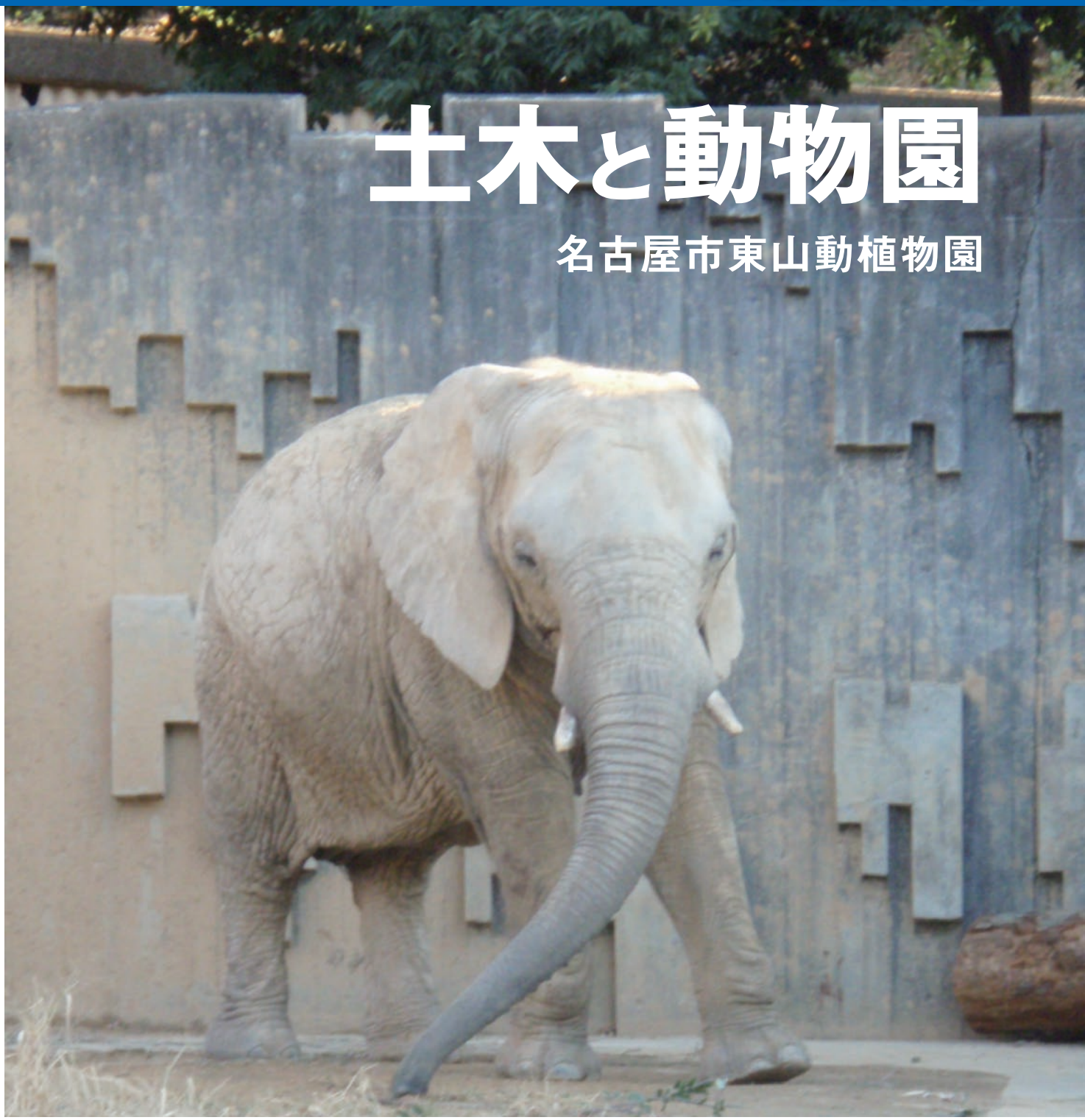
土木と動物園

名古屋市東山動植物園



さまざまな動物を身近に感じることができる空間、動物園。そこでいろいろな表情を私たちに見せてくれる動物たち。

そんな動物たちのお世話をしているのは実は…土木屋さん!?

もう少し詳しく調べてみると、動物園の管轄は地域によって異なるが、日本ではその多くが土木局の所管となっていることが判明した。なぜ、土木なのか!? 学生編集委員はその疑問を解決するべく、動物園へと向かった!

今回訪れたのは名古屋市の東部、東山の森にある東山動植物園。70年以上の長い歴史があり、動植物展示数・年間入場者数をみても国内で指折りの動物園である。東山の森には動植物園のほかに、遊園地、東山スカイタワーなどの施設が充実しており、子どもだけでなく、大人も1日かけてたっぷり楽しめそうだ。

近年、動物園の役割は変化しているといわれている。東山動植物園も「東山動植物園再生計画」のもと、新たな動物園の形態を模索している。なぜ、土木が動物園の管

東山スカイタワー（左）からは、環境教育の舞台である東山の森が一望でき、絶景スポットとなっている（下）

環境教育

形態展示だけではつまらない、行動展示だけでもつまらない

形態展示とは、檻の中に動物が入っている状態。人間が見やすいことが重要視されている。行動展示とは動物本来の動きや生活を再現しようというもの。東山動植物園の再生計画の大きな特徴の一つとして、さらに進化した生息地体感型展示がある。これは観客がまるで自然の中へ足を踏み入れているような感覚を引き起こす展示方法だ。檻の中の動物、という動物園のイメージはもう卒業だ！　このように、再現された生息地で生きる動物たちをみて、訪れた人びとが自然に興味をもち、考え、持続可能な環境を次世代に受け継いでいくための環境行動を促す役割を担っているのである。動物園って奥深い！

種の保存

動物たちのお世話もしています

私たちが安心して動物たちと触れ合えるような、そして動物たちを身近に感じられるような空間を提供してくれているのは、土木屋さん。しかし、それだけではなかった！　土木局では動物の赤ちゃんが生まれたら数時間おきにミルクをやったり、泊り込みで面倒を見ることもあるとか。

動物たちが幸せに暮らせるように

人間の手で飼育されることによって動物たちがストレスをためないように飼育環境の改善も行う。それが、環境エンリッチメント。環境エンリッチメントには給餌回数を増やしたり、給餌方法に工夫を加えたり、複数の個体を一緒に飼うなどがある。動物たちの命を支えることも土木の重要な仕事の一つであるのだ！

理・運営を行うことになったのか？　そして、土木と動物園の新しい関係とは？

なぜ土木局が動物園を管理しているの？

「動物園＝普段はお目にかかれない動物を見て楽しむ場所」という考えの読者は多いのではないのだろうか。私はまぎれもなくそう認識していた一人である。「動物園は娯楽施設の一つだ！」と思っていた。動物を見せる、つまり展示は動物園の機能の一つであることは間違いない。東山動植物園の場合、「公園の中にある動物園＝娯楽施設」という位置づけであり、その公園は土木の管轄である。そのような経緯をたどり、動物園も土木の所管になったという。動物園は、都市生活に疲れた現代人を癒す憩いの場、一種の社会インフラとして機能している、といってよいだろう。

が、しかし…

動物を見せるだけが、動物園の役割ではないんです

動物園の役割、それは、

①動物の展示
②環境教育
③野生動物の保護（種の保存）
④野生動物の調査・研究

である。すなわち、動物園はもはや①展示の場のみではないということだ。日本の動物園がその領域を教育学、生物学などに広げることで、これを管理する土木屋さんの仕事も広がりつつあるのだ。そして、現在進められている「東山動植物園再生計画」は、そのような役割の変化に応じて計画されたものであるといえる。本稿では特に②環境教育と③種の保存について述べる（上の囲み参照）。

楽しむだけではなく、学んでほしい

動物園の果たす役割が変わってきた今、人と自然をつなぐ場として動物園は変貌を遂げようとしている。

楽しいことは当たり前。それだけでは終わらず、人びとが自然・環境・命の尊さを学ぶ場としての存在、それが動物園の本来あるべき姿なのだ。

今回の取材で、動物園という施設を通じて土木が自然環境教育に貢献しているという新たな認識が生まれた。また、動物行動学・教育学などといった他分野との接点を垣間見ることができたように感じた。

学生編集委員　杉江　裕実
関根　正之